

ハイブリッド留学の挑戦 —真のグローバル人材育成をめざして—

工学院大学

吉田司雄

ハイブリッド留学とは

グローバルに活躍できる真の国際人育成を目指して、工学院大学が独自に開発したプログラムである。その最大の特徴は、「語学の習得から」というこれまでの留学スタイルを脱却し、「まず海を渡る」ことを最優先させ、海外で暮らしながら国際感覚を養成することを最大の目的としている点にある。平成27年度の「大学教育再生加速プログラム（AP）」に採択されて以後、プログラムに様々な改良を加えながら、海外で主体的な共同学修経験を積むことで、より大きな飛躍へとつなげられるよう努めてきた。また、留学に参加しなかった学生にも海外協定校学生と交流ができる機会を提供するCAP（Campus Attending Program）を実施するなどしてきた。

大学時代に留学しようとする場合、留学中の授業の遅れや単位不足による留年を防ぐためにも、現地協定大学等の開講する専門科目を現地言語にて履修し、帰国後その単位を認定してもらう形をとるのが一般的である。そのため留学に際しては、まず協定大学への入学必須条件として語学力判定テスト（TOEFLやIELTSなど）での一定以上の基準点獲得が必要となる。さらに協定大学での授業料も徴収されるため、特別な奨学金等を受けることのできた学生以外には、参加するためのハードルが高く、留学を身近なものとして捉えるのは困難であった。この「言葉の壁」と「費用の壁」を取り払うことを第一義としたのが、ハイブリッド留学なのである。

そして、AP採択期間中の取り組みとして新たに始めたものの一つが、Facebookを利用した「観察日記」の執筆を軸とするキャリア支援である。せっかくの留学体験であっても、就職活動の中で自らの体験を深化させつつ言葉化できないのではもったいない。実際初期の感想には「楽しかった」「よかった」というものが多かったのだが、もっと学外研修の意味を明確化する必要があると考えたのである。そこで「観察日記」を現地で執筆させ、さらにそれを元にしたハイブリッド留学ポートフォリオファイルという目に見える成果物を作成させることで、学生にとって留学が一過的な体験ではなく、将来へとつながるものであることをより強く意識してもらおうと考えたのだ。あわせて、参加者へのルーブリック調査やPROGテスト結果との相関を押えつつ、成果の検証と可視化とに取り組んできた。



とりわけ今回は、建築学部の学生たちが実際に作成したハイブリッド留学ポートフォリオファイルを手にとりいただき、その生の声を聴いていただきたいと思う。建築学部のハイブリッド留学実施地はイングランド南東部ケント州にあるカンタベリーである。有名なカンタベリー大聖堂を始め、イングランドで現存する最古の教区教会である聖マーティン教会やローマ教皇の命で6世紀末キリスト教布教のためにやってきた聖アウグスティヌスが作った修道院跡がユネスコの世界遺産に登録されている。城壁跡に囲まれた市内中心部には多くの歴史的建造物が残り、学生たちはキリスト教と深く結びついたイギリスの歴史や社会を直に学ぶことができる。また、鉄道を利用すれば2時間程度でロンドンに行くこともできる。こうした環境を生かし、ロンドンの著名な建築物を見学したり、郊外の田園都市を訪れたりといったフィールドワークが授業のなかに組み込まれ、また、カンタベリーにあるケント大学との合同授業も行われている。そこで、学生たちは何を見、何を学んできたのか、ぜひ耳を傾けてほしい。